

“ さあ花婿だ、迎えに出なさい。”

マタイ25、6

2014年降誕祭の書簡

シトー会総長マウロ・ジュウゼペ

今年の“会への書簡”は“奉獻生活の年”の幕開けと時期が一致しました。この一年間、法王様と教会はわたしたちが、過去は感謝をもって顧み、現在は情熱をもって生き、そして未来は希望をもって臨むことを勧めておられます。この一年の間、わたしたち一人一人そして共同体にとってシトー会のカリスマに沿って生きる奉獻生活の形でキリストにより密接に従うという召命を深く認識することが大切です。

この書簡を通じ、皆さんと一緒に源に戻ってわたしたちの召命について考察を深めたいと思います。何故なら、悠久の歴史をへて豊かになると共に多様化し又分散化した様々な修道会は源に立ち返ることによってしか創立期の新鮮さを再び見いだすことができないからです。カリスマそのものは聖霊の賜物ですから老化することはありません。しかし個人や共同体では新鮮さが失われ、味が落ち、熱心さや情熱が冷めてしまいます(黙2, 4)。

現在を生きる召命に情熱を失ったら、過去を感謝をもって顧みることも未来を希望をもって眺めることも出来ません。現在を生きる情熱こそが感謝と希望にその理由、根拠、そして実体を与えるからです。過去への感謝、未来への希望は現在における情熱からわき上がる気持ちです。現在への情熱は感謝と希望を含みそして育みます。情熱的に現在愛し合う夫婦は過ぎ去った日々を感謝し、未来を希望をもって臨んでいます。反対に現在もう愛がさめてしまった夫婦は過去を哀感と後悔の目で眺め、将来を恐れるか又はなんとかましにならないかと夢みしています。

わたしたちが自分たちに問わなければならないこと、全てのキリスト教徒の生活と同様奉獻生活を完全に生きる為しなければならないたった一つの質問はこれです；
今、現在、どのようにして情熱をもって召命を生きることができるだろうか？そこからだけ感謝と希望の火がよみがえるでしょう。

出会い

“初恋”の多くは無我夢中のうちに終わり発展がありません。しかし黙示録のしめす“初めのころの愛”は感情よりも出会いを表しています。出会いは夢中な気持ちよりも大きく深いものです。なぜなら出会いはまず人と人が関わり合う現実だからです。現在、家族や共同体の絆が続かないのはもしかすると人と人を結ぶのは誠実さではなく気持ち、感情だと思っているからかもしれません。反対に、全ての召命は人への忠誠、またはその召命によって与えられ、お互いに受け入れた共同体への忠誠を求めます。

奉獻生活の召命は主イエズスにつき従い、主と“ともに居る”(マルコ3, 14)忠実さ、そして具体的な教会の神秘体の内で愛しそして従う為にわたしたちに与えられた

人々と留まる忠実さを伴います。聖ベネディクトは修道生活に呼ばれた者にとって必要不可欠な条件として“何ものをもキリスト以上に大切にしない”（戒律72:11）をあげていますがこれは常に修道院長への従順と共同体への兄弟的及び確固とした絆の内で実践されるものです。

自身でキリストに従う、又は人々の内に居られるキリストに忠実に従う時、感情は忠実さの原因であるより結果です。聖ベネディクトは院長に対してほぼ自動反射的な従順（戒5,1 “一瞬の遅れも無く”、5,4 “直ちにこれを、ためらわずに”）を戒律の始めに求めています。最後には“自分たちの修道院長を真心のこもった謙虚な敬愛の念をもって愛さなければなりません。”（戒72、10）と言っています。修友の間の秩序立った階層間の奉仕と従順（戒63）の結果は“修友に対する愛を清らかに実践”する事です。

他者への忠誠は、その人を理想化した盲目の愛ではなく思いやりを生み、本当に成熟した人間関係はお互いに知り合い許し合うことで成長します。

キリストへの忠実も同じ様、増々感性豊かになって成長します。最初に付き従っていた“先生”、“ラビ”（参詳ヨハネ1、38）は“友”、“花婿”となり、彼に出会うことによって各々の、又全ての人生が成就します。（参詳マタイ25、1-11）

キリストとの出会いがキリストと共に歩く道へとつながれば、心の一致である抱擁へと成長するでしょう。

福音書のいたる所に主との出会いが描かれています。使徒達、サマリヤの女性、ザアカイ、金持ちの青年、マグダラのマリヤ、ライ病者、罪人達、ファリサイ派の人々と律法学者、その他沢山の出会いを黙想するとわたしたち一人一人が招かれている唯一無二の出会いを深く知ることができます。

同様、エマオの弟子の福音は復活なさったキリストに出会うとはどういうことかを描いています。つまりキリストが死と罪に打ち勝ったのはまさにわたしたちが彼に出会い共に生きる為だったということ。

“彼は彼等と一緒に歩き始められた”

キリストとの出会いの経験を深めるにはキリストと共に歩かなければならないことをエマオのエピソードは教えてくれます。そして、往々にしてわたしたちはそれに気付いていないことも。“二人がともに話し合ったり、論じ合ったりしていると、イエズスご自身が近づいて来て、いっしょに歩き始められた。しかし二人の目はさえぎられていて、このかたがイエズスであるとは気づかなかった。（ルカ24、15-16）”。いのちの主との出会いという出来事に目と心が開かれるようキリストは率先してわたしたちに出会い、連れ添い、話しかけ、聖霊をお与えに成り、そして御聖体、教会の内に留まられます。

イエズスとの出会いはまず思考、不安、計画を清めます：“イエズスは二人に、‘あなたがたが歩きながら語り合っているその話はなんの事ですか’と仰せになった。そこで二人は暗い顔をして立ち止まった。...‘わたしたちは、イスラエルをあがなってくだ

さるのは、このかただと望みをかけていました。しかも、その事があってから、きょうでもう三日目です’”（ルカ24, 17-21）。

エマオの二人の弟子は現在を悲しみにくれ、空しく過ごしていました。何故なら彼等はイエズスと一緒にいた時でさえイエズスに希望を置いて将来を見据えていたのではなく、彼が自分達の栄光と権力の欲望をかなえてくれると考えていたからです。それで彼等のごく人間的期待が外れた今、過去を感謝でもって顧みる事ができません。

イエズスは彼等を正し、そして記憶、情熱、希望の浄化の道を同伴し、まだ書かれていなくともすでにひろまりつつある復活の良き便り、福音の光の元で神の御言葉の理解を深めます。イエズスとの出会いによって人生の全ての側面、人、時間、空間、に新しい関係が生まれます。

エマオのエピソードは、イエズスとの出会いが同行へと発展すればわたしたちの人生は変わるし新たになることを教えています。主と歩く道は；

- 是正と改心：“心が鈍く…信じられない者たち”（ルカ24, 25）、
- 耳を傾ける：“そして、モーゼから始めて、すべての予言者がご自分について聖書。全体にわたって書いている事を、二人に説明された”（24, 27）、
- 切望する：“いっしょにお泊まりください”（24, 29）、
- コムニオン、聖体拝領：“いっしょに食卓につかれたとき、イエズスはパンを取り、賛美をささげて、手で分け、二人にお渡しになった”（24, 30）。

“熱心な証”

この過程をとうしてのみイエズスとの出会いはわたしたちの心の底まで変えるのです。

“あのかたが道々わたしたちに話しかけ、また、聖書を説き明かされたとき、わたしたちの心は内で燃えていたではないか。”（ルカ24, 32）

わたしたちとともに歩むキリスト、御言葉だけがわたしたちを根本から一新します。この変化は何をもたらすのでしょうか。それはキリストの現存に気づき、すべての事をキリストの光のもとで見えることを可能とします。まえは失望、悲しみ、恐れであったことが感謝、情熱、希望にかがやきます。それが人を生けるキリストとの出会いの、勇敢な疲れを知らない証人にするのです：“そして、時を移さず出発して、エルサレムに引き返してみると、十一使徒とその仲間とが集まっていて、‘主はほんとうに復活して、シモンにお現れになった’と話していた。そこでこの二人も旅の途中で起こった事や、パンを手で分けたとき、イエズスだと気づいた次第を物語った。”（ルカ24, 33-35）

教会と世界でキリストの証は互いに反射しあい、高まり合う光の交響曲のようになります。私のキリストとの出会いは他者の主との出会いに反映され、それによって出会いの確信が増々強まり、美しくなり、生き生きとし、現実になるのです。そこになにもよっても破壊されない一致、兄弟姉妹愛、友情が生まれます。基礎は気持ちや親近感、同類性ではなく、わたしたちのまっただなかに生きておられる主の経験の分かち合いです。この言い尽くしがたい経験を深めるため主はいつも証の交響曲に加われま

す。“二人がこう話していると、イエズスご自身が皆のまん中に立ち、‘あなたたちに平安があるように’と仰せになった。”（ルカ24, 36）

共同体の内で、主との出会いと同行の経験を互いに証合い育むと、共同体のメンバーだけではなく全世界において平和の源である主の現存が深まり明白となります。

神の国のキリストを見る

高度四千メートルにあるラ・パス(La Paz)の姉妹の農場でこの手紙を書き始めたのは丁度 聖司教シャルル・ボロメの祝日でした。彼はわたしたちと同様“公会議以降”の司教でした。ミサの祈りに注目したのはそれがキリスト教徒、特に奉獻生活者の任務と恵みの集大成を示しているように思えたからです。“主よ、あなたの民に聖シャルル・ボロメを満たした精神を培ってください。そうすればあなたの教会は常に刷新され、いつも福音に忠実で、世の中にキリストのまことの姿を示すことができるでしょう。”

教会をたゆみ無く新たに作る福音遵守は、道徳的に一貫したメッセージを伝えることばかりに気をとられず、世の中に主のまことのお姿を反映することが大切です。キリストの御顔は、出会いそしてともに歩む人を探し求めている愛のまなざしです。もしわたしたちが人生の旅路を、エマオの弟子達のように主に会い、その証をすることの情熱にかられたなら、主のまことの御顔が世に現れるでしょう。

聖ベネディクト戒律の序文でよく一部引用されるけど全体はあまり深く考察されたことの無い一節を思い出しました：

“心から愛する修友たちよ、わたしたちを招かれる主のこの言葉ほどに甘美なものがあるでしょうか。見よ、主は、わたしたちに対する慈愛の念から生命の道を示しておられます。そこで、わたしたちは信仰と善いおこないの実践を腰にまとい、わたしたちを‘み国に招いてくださる’（一テサ二・十二）主を仰ぎ見ることができるよう、福音の導くままにそのみ跡に従うことにしましょう。”（戒 序19-21）

聖ベネディクトは戒律が示す道のすべて、つまり福音に導かれキリストの跡に従う召命をここに集約しています。わたしたちの召命はまず先に、主に心をうばわれ、引きつけられること：“（これ）ほどに甘美なものがあるでしょうか”主の甘美さ、優しさといつくしみ、この全部が、わたしたちの召命の背景なのです。キリストを見つめつつ、御顔を求めつつ、跡をついていきます。主の甘美さはわたしたちを招き、引きつけ、そして御国で主を仰ぎ見たいと望み、従います。福音は掟である前に神の御言葉の美しさです。御言葉は人となりわたしたちのためにいのちの経験となりました。信仰と善いおこないは規則よりむしろ“腰帯”と表現されています。それはキリストの魅力にひかれ、かれに従い、福音に添った生活の行程を走りやすいように腰にまとうためです。

イエズスは主の御国にわたしたちを招きます。御国はわたしたちが主を見ることのできるその所であり、未来の国やこの世の後にある国ではありません。なぜならキリストはこの世にお現れになり、わたしたちが祈りと愛の内に主を仰ぎ見ることをお望みになり、示されるからです。

混迷し傷ついた現代社会で、イエズスに身近に従うように呼ばれている者は、すべての人にとってこの神秘のしるしとなることが増々緊急に必要となって来ています。キリストを見つめる者はまことの御顔を示します。“主を仰ぎ見ることができるよう”（戒 序21）生涯を神に捧げている者のまなざしに反映する主のまことの御顔を世は求めています。キリストを仰ぎ見ることが出来る者とは他の何にもまさってキリストの美しさにひかれた者です。主を何にもまして渴望し、主の御声、御言葉を求め、御言葉がエマオの弟子達にあったようにわたしたちの内でも燃え上がる、それが神の前で人にとって本当に価値あることなのです。金持ちの青年は決して徳の無い者ではありませんでした。でも望みが欠けていたのです、キリストを優先する。彼はキリストの美しさ、つまりキリストの愛のまなざしに自分が引きつけられることをのぞまなかつたのです。（参マルコ10, 21）

養成初期そして生涯養成で、従順、清貧、貞潔、そして謙遜を理解し又実践するのをお互いに助け合うとき、それがキリストの美しさをなにもまして優先する場と認識するのがいかに大切なことでしょうか。そうすることによってだけそれらの選択と徳が不毛とならず、愛の証を実現し、他の人に本当の主の御顔を見せることができます。

世の中は神の国を必要としています。十字架につけられ復活し、人を愛することしか知らず、そして愛することによって人を救う謙虚な王が治めるのを世は必要としています。わたしたちはキリストを仰ぎ見るのを望むために呼ばれています。なぜなら仰ぎ見、わたしたちのまただ中に現存されるかたを認めることによって御国そのものがこの世に現れることが出来るからです。キリストを仰ぎ見る者は世の中を変えます。

諸国を照らす光

キリストとの出会いに生涯を捧げることは奉獻生活の根本的な義務でありお恵みでもあります。祈りの生活、また仕事で本当にこの目標にわたしたちは精神を集中しているでしょうか。生活のすべての場、典礼や作業場、独りの時もまた修友と一緒にいる時も、共同体でもまた社会とのつながりにおいてもわたしたちはキリストに出会おうとしているでしょうか。

キリストとの出会いは人生の断片を結びつけ統一することのできる唯一無比の経験です。この経験によってだけわたしたちは、この新しい人生の喜びと平安にみちた証人となれます。キリストとのまじわりによって人間関係においても色々な状況でも百倍もの報いをうけます。神の国のための貞潔はまさしく主との出会いを優先する奉獻です。これによって主はわたしたちをすべてにおいて豊にし、キリストの体である教会の一人一人が各々の召命を最大限に、実りゆたかに生きることを助けるのです。

この奉獻生活の年に教会と人々への愛の為にわたしたちが深めなければならないことがもしあるとすればそれはまさにキリストとの出会いだと思えます。この宝を買うためにいっさいを捨てるものはすでにこの宝を持っていることに気がつくでしょう、しかも自分の為だけではなく、みんなのために。

終末に関するたとえ話しの、花婿を待つ10人の乙女の話（マタイ25：1-13）で婚礼の祝宴場に入ることができた5人の乙女の賢明さは、花婿との出会いを本気で準備したことにつきます。反対に愚かな乙女たちはすべてをそそいで出会いを用意していませんでした。しかし十分に油を持っていた者たち、つまり灯りをつけていた者たちは、花婿が現れる人生の場で、キリストを待ち望むその光でもって他の者をも照らすことができました。キリスト者の“目を覚まして待つ”ということは、キリストのために灯されたあかりで回りにいるすべての人と物を照らし、そしてすべての人に、わたしたちは主に出会い、来るべき方と一緒に在るために在るということを知らしめます。現実の全て、全人類はキリストを主と迎えるために在るのです。わたしたちは世界にそれをあかししているのでしょうか。

10人の乙女のたとえ話しのまん中あたりに叫ぶ声がします：“さあ花婿だ、迎えに出なさい”（マタイ25,6）。寝ていた者は皆 真夜中にこの叫び声で起こされます。家の外からか内からかどこからこの叫びがくるのか誰も知りません。もしかするとこの叫び声は神が全世界に向かって鳴り響かせ、全ての現実が反響したのかもしれない。神と全ての被造物は人生の根本的な務めを声高らかに叫んでいます：眠りから目を覚まし快適な家から出なさい。キリストはもうすでに戸の前に立ち、入るために戸板をたたいておられる。キリストをお迎えする者はけっして現実の日常から引き離されることはありません。その者は賢い乙女のように花婿といっしょに居て、現実の日常の場は神と、わたしたちとすべての人との婚礼の場となります。

日毎、目を覚まして自分に問いかけなければなりません：キリストに出会いに行くため、わたしたちの日常にお迎えしてどこでもだれとでもいっしょに絶え間ない宴をキリストと祝うために、今日どのように自我の殻から出たらいいかを。

わたしたちは知っています；キリストがのぞんでおられるのは 自我から出て、わたしたちの関心、愛、時間、そして才能を必要としている貧しい人達の中でキリストに御会いすること。これは聖ベネディクトも何度となく述べています。キリストはわたしたちが共同体のすべて場で自我の殻から主に会うために出て行くのをお望みです；典礼の祈りから始めて、従順でも、沈黙でも、有害無益な数々の気晴らしを断念するときも。また、キリストに出会い、わたしたちの心に愛と耳を傾ける場をもうけるために自我の殻を破って外に出ることをキリストが望んでおられることを知っています。神に出会うために創られた心からなんと遠くにわたしたちは居るのでしょうか。

“さあ花婿だ、迎えにでなさい”

もしかするとわたしたちが誓う、清貧、従順、貞潔、共同体への定住そして聖ベネディクトのいうすべての“*conversatio morum*”（修道の生活）を“花婿キリストに会うために自我の外に出る”と解釈したらいいのかもしれない。そうすればわたしたちの召命を真実と謙遜そして熱意をもって生きることの助けとなるでしょう。目を覚まし、闇から抜け、あかりのように世を照らす助けとなるでしょう。

降誕祭は主の奉献の祝日で終わります。それはまた奉献生活の祝日でもあります。教会が終課で歌う讃歌のシメオン老は奉献生活のモデルです。キリストを仰ぎ見るため

だけに生き、そしてキリストに“異邦人を照らすためのひかり”を見ました。(ルカ 2, 32)

それこそがわたしたちの召命の根本なのです。わたしたちの忠誠、そして献身を確かめる点はそこにあります。つまりすべての人生を完成に導く光をキリストの内に見るために生き、そして御顔を仰ぎ見ながら人びとに示す。

待降節と降臨祭そして奉獻生活の年のあいだに、わたしたちが常に共におられるイエズスとの出会いを深め、そして人類の愛のためになににもまさってキリストを優先することができますように。

あなたがたの、

Fr. Mauro-Giuseppe Ocist
総長